

館山支部だより Vol.107

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



寒さに強いノースポール
<11月中旬 社宅の庭先に>

2年間に及んだコロナ禍でしたが、ワクチン接種の効果と合わせて感染防止に対する政府、諸団体、国民の努力が実って、このところ全国的に確実な減少傾向が見られることは大変喜ばしいことです。ところがヨーロッパでは再び大きな波に見舞われており、一部の後進国では依然として1日の新規感染者数が〇万人という信じ難いような状況が ”ごく身近な世界”で続いております。国内の今の減少傾向を”真の終息”とするのは、時期尚早と考えるほうが無難ではないでしょうか。 <川村 記>

支部の活動概要

- | | |
|---|---|
| <p>《10・11月活動実績》</p> <ul style="list-style-type: none"> 10..2(土) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉) 10.10(日) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社) 11.13(土) 館山砲術学校戦没者慰霊祭※(館砲祈念塔) 11.19(金) 館山航空基地殉職隊員慰霊祭
(コロナ感染拡大防止のため隊員のみで催行) 11.27(土) 11月支部役員会(コミセン) | <p>《12・1月活動予定》</p> <ul style="list-style-type: none"> 1月初 第21航空群司令年始表敬
(OB3団体代表、未定) 1.29(土) 1月支部役員会(コミセン) |
|---|---|

館山海軍砲術学校戦没者慰霊顕彰祭 11/13(土)館砲校平和祈念塔

旧海軍館山砲術学校出身戦没者の慰霊顕彰祭が、館砲校平和祈念塔(佐野)で行われました。顕彰祭には、県会議員、市議会議員、海自第21航空群代表のほか地元関係者、また海自OBでは藤田元海幕長、日向館空会・館山支部顧問ほか館空会会員等、50余名が参列し、全員による国家斉唱に引き続いて斎主による一連の祭典が粛々と執り行われました。今回の慰霊顕彰祭は、社団法人戦没者慰霊の会「櫻街道」(注記参照)主催で行われたもので、平成27年以降、館砲会関係者の高齢化により途絶えていた慰霊祭でしたが、今回8年ぶりに館砲校とゆかりの深いこの場で執り行われたことは、回帰を待ち侘びていた英霊もさぞ安堵されたことでしょう。<支部長>

<注> 一般社団法人「戦没者慰霊の会・櫻街道」について

「櫻街道」は、海外のかつての激戦地を巡って慰霊祭を行い、国内では沖縄での遺骨収容や各地の戦跡の慰霊巡拝、墓地・慰霊碑の清掃奉仕を主な活動とする団体で、「櫻街道」という一風変わったネーミングは、戦後76年経った今なお祖国に戻ることができず、海外の激戦地で眠る多くの英霊に、故国の桜を見ていただこうという趣旨から、慰霊祭に合わせて桜の苗木を植える活動を行うことに由来するということです。この会の発足時期や運営の母体(役員、会員の状況等)について分からない点もありますが、関係者の高齢化とともに後継者が途絶え、慰霊行事を継承することができなくなるケースが少なくない現状に鑑み、特定の慰霊対象に偏ることなく、全国的に慰霊・奉仕活動を展開していることは、実に奇特な行為だと思います。

トピックス

第37回危険業務従事者叙勲

田辺幸次会員(海) 瑞宝双光章(防衛功労)受章
晴れのご受章を心から祝福申し上げます。 <支部会員一同>

新入会員紹介

10月期 沼里 一会員(海、21空) 即日入会
自衛隊での勤務を全うされ 隊友会への即日入会を歓迎致します。



<勝浦岬の海軍電探1号機>

特別寄稿：海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)に携わって

東京都内でタクシー会社を営んでおります高橋と申します。父が館山海軍砲術学校の兵科3期予備学生出身で、安房神社の予備学生戦没者の慰霊碑建立委員長を務め、同会の初代会長として慰霊祭の催行に携わってきた関係で、安房神社の慰霊祭には深い縁があります。社名の「錨」は海軍に因んだもので会社のロゴ・マークとしても好評を博しております。

今年も10月10日、館山の安房神社で第3期兵科予備学生戦没者の第51回目の慰霊祭が執り行われました。毎年、この神社を訪れる都度、静粛で深い神聖な雰囲気身に引き締まる思いに駆られます。今から四十年前以上の学生の頃、両親に連れられて安房神社の戦没者慰霊祭に参列したことがあります。北海道から沖縄に至る全国各地から集まった同期生が、早朝から慰霊碑の前で全員が海軍の略帽姿で再会を喜び合い、亡き戦友を偲ぶ姿が見られました。慰霊の式典は、地元の名士、来賓も加わりしめやかに執り行われました。終了後、高らかに響き渡るラッパの吹奏とともに軍艦旗が掲げられ、参列者全員で慰霊碑に敬礼、そして「同期の桜」が合唱されました。その後境内の集会室に場を移し、戦時中砲術学校とゆかりのあった地元の方々も加わり、一同車座になって地元名産の落花生をつまみながら盃を交わし、当時の思い出話に花を咲かせるなど、旧交を温め合うのに時の経つのを忘れた記憶が鮮やかに頭に残っております。

昭和18年10月、戦局が激しく推移する中、学徒動員で全国から大勢の予備学生が招集され、館山海軍砲術学校には1440名が兵科三期予備学生として入校しております。血の滲むような6か月間の特別訓練を受け、翌19年4月海軍少尉に任官して各地に赴任して行きました。

アリューシャン、オホーツクからソロモン、インド洋等々、広範な戦域とともに孤立無援の基地勤務や優勢な航空攻撃に晒された中での艦艇乗組など、熾烈を極めた壮絶な戦いを経て、20年8月15日、長い戦いが終わりましたが、229名の同期生が帰らぬ人となりました。

昭和45年10月10日、遺族の方々や同期生が安房神社に集い、慰霊碑除幕式とともに第1回兵科三期予備学生戦没者の慰霊祭が催行され、同期生を代表して多田実氏により献辞が奉読されました。政治評論家として知られ、朝日新聞の論説主幹をも務めた多田氏の長文の献詞には、祖国の前途を憂い、殉国の至情から兵科予備学生としてペンを剣に代えて戦場に身を投じ、散華された同期生たちの痛烈な真情、そして生きること、恒久平和の尊さを末永く後世に伝えたいという生還した同期生たちの痛切な思いが込められ、万感胸に迫るものを感じさせます。

平成12年10月の慰霊祭で「鎮魂碑」が除幕されましたが、これはこの献辞を鋼板に印字し、「慰霊碑副碑」として戦没同期生の顕彰とともに平和の尊さを末永く広く後世に伝えたいという遺族、同期生の強い思いを目に見える形で残したものです。

以降、同期生の高齢化に伴い慰霊祭の催行は安房神社に寄託され、元気な会員が任意・個人で参拝する形に変わり今日に至っております。歳月は流れ、同期のほとんどの方々が鬼籍に入られ、残された遺族・親族の方々の参列もめっきりと淋しくなりました。

戦後の日本は奇跡的な復興を成し遂げ、平和を謳歌しておりますが、その礎となられた先の大戦で亡くなられた多くの方々の献身と犠牲を決して忘れてはならないと思っております。最後になりましたが、慰霊碑の建立以来今日まで真心を込めて慰霊祭の催行に当たって来られた安房神社の岡嶋官司の長い間のお力添えに、親族の一人として深謝申し上げます。「英霊安らかなれ」と心からお祈り致します。

《高橋克弘、錨自動車KK代表取締役社長》

館山航空基地(旧海軍)には電探(レダー)があったのだろうか？

「電探(でんたん)」とは、電波探信儀の略称でレーダーのことである。旧海軍では、小規模ながらもかなり早くから技術研究所の一部門で電探の研究が進められており、日米開戦直前に千葉県の勝浦と横須賀の衣笠に「一号一型電波探信儀」が設置されるに至った。写真で見るとアンテナがかなり大きく、早期対空警戒レーダーとしてまだ試作段階と言えるが、ともかく日本が開発したレーダー第一号と言えよう。

開戦翌年の昭和17年4月中旬、米空母エンタープライズから発艦した16機の陸軍の爆撃機B-25が低空で日本本土に接近し、東京、横浜、川崎、名古屋、四日市などの各都市に爆弾を投下し、国民の心胆を寒からしめた。いわゆるドーリットル空襲と言われるもので、日本の対空警戒能力の脆弱性を暴露したものである。問題は、勝浦と衣笠に設置した第一号電探が、接近するドーリットル編隊をまったく探知できなかったことがあげられるであろうがこれについては後述する。

館山基地の電探の装備(有無、所在)を探る

館山航空隊の電探の装備に関する公式文書は見当たらないが、次の二つの資料から電探の装備状況を推測することができよう。ひとつは、昭和18年初めに作成されたと考えられる「館山航空基地次期戦備施設計画位置図(横須賀施設部製、防衛研究所保管資料)」の中に、「館山航空隊電探所」が記されている。通称蟹田村と谷を挟んだ南側の小山(標高128m、この近辺では一番高い)の頂上付近で、電探の設置に適していると考えられる。実際に装備されたかどうかは分からないが、電探の装備計画があったことを物語るものである。

もうひとつは、海軍航空本部電波部(海軍省の部課のひとつ)の内部資料と見られる「電波探信儀装備状況」に、S20. 6. 1現在における海軍基地の電探装備状況がまとめられており、館山基地には「3式1号3型」電探2基が記されている。公式文書ではないが館山基地の電探の存在を裏付けるものと考えてよいであろう。開戦後、海軍は電探の性能向上に必死の努力を払い沢山のタイプを作り上げたが、この3式3型が最も多く製作され、小型警戒用電探として成功作のひとつと言われている。

勝浦・衣笠の電探第1号その後、レーダーの開発あれこれ

勝浦・衣笠の電探は、当初は技術研究所の管理下に置かれていたが、開戦翌年の4月1日付で横須賀警備隊に装備替が令された。(横須賀警備隊戦時日誌)。必然的に(レーダーの知識経験皆無の)警備隊員に対する指導(講習)とともに、(技術者にしか扱えない難解な)器材の改修(改造)工事に相当の期間を費やしたであろうことが容易に推測できる。見方を換えれば、ドーリットル爆撃隊の接近時、勝浦・衣笠の電探は「非稼働状態」であったというのが実態であろう。

エレクトロニクス分野で日本(軍)は完全に出遅れたと言われている。海軍がレーダーの実用化に本腰を入れたのは開戦の年の昭和16年の春ごろと言われ、その時期、英米は陸上基地だけでなく艦艇、航空機すべての分野で実戦配備の域にあった。日本には独自で開発した「八木アンテナ」という優秀なパーツがあったのである。開戦時、日本軍が捕捉したシンガポールの英軍の警戒レーダーやその頃米軍の艦艇に装備されていたレーダーには、この八木式アンテナが使われていたという。米国は、レーダーの開発に日本の1年分の国家予算に相当する研究費を充当したと言われ、研究者・技術者の数も比較にならない、科学技術の研究・開発の底辺の広さ・深さが違うのである。結局は、電波兵器に対する用兵者の認識、考え方に帰結する問題なのであろうか。

《自称地域史探案マニア その32》